

世界的なインフルエンザ発生状況 (WHO報告より)

- ・2003年9月～2004年2月までに、アフリカ、アメリカ、アジア、ヨーロッパおよびオセアニアからインフルエンザの報告があった。
- ・2003年10月に北アメリカ、西ヨーロッパ諸国から流行が始まった。
- ・流行は過去3年間と比較して早く始まり、活動性が高かった。
- ・その後、東ヨーロッパやアジアでも流行し始めたが、これらの諸国では全般的に中等度の活動性であった。
- ・ほとんどの国で流行の中心はA/H3N2型であり、AH1型の流行はアイスランドとウクライナのみであった。
- ・B型の流行は報告されなかった。
- ・今シーズンの報告の多くはA/H3N2型であり、その大部分はFujian株で、残りはA/Panama/2007/99類似株であった。

2004/05シーズン用のインフルエンザワクチン推奨株—WHO

IASR Vol. 25 p 103-104より

(WHO, WER, 79, No.9, 88-92, 2004抄訳)

- A/H3N2型の大部分はA/Fujian(福建)/411/2002類似株であった。
- AH1 型の大部分はA/New Caledonia/20/99類似株であった。
- B型の多くはB/Yamagata(山形)/16/88系統で、B/Shanghai(上海)/361/2002と非常に近縁であった。

2004/05シーズン(北半球冬季)のワクチン推奨株は以下のとおりである。

- A/New Caledonia/20/99(H1N1) 様ウイルス
- A/Fujian/411/2002(H3N2) 様ウイルス
- B/Shanghai/361/2002 様ウイルス

日本の定期/任意予防接種スケジュール2004年



		出生時	3 カ 月	6 カ 月	9 カ 月	1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	13 歳	14 歳	15 歳	16 歳	17 歳	18 歳	19 歳	20 歳	21 歳	22 歳	23 歳	24 歳	25~	60~	65~			
予 防 接 種 法	ポリオ (経口)		↓		↓																														
	*1 DPTⅠ期 DTⅡ期	DPT	↓	↓	↓		↓																												
	麻疹 (はしか)					↓																													
	風疹					↓																													
	日本脳炎							↓	↓	↓					↓																				
	インフルエンザ																																	毎年1回	
結核 予防法	BCG		↓																																
任 意 接 種	インフルエンザ																																	毎年2回(1~4週間隔)	毎年1または2回(1~4週間隔)
	水痘 おたふくかぜ (流行性耳下腺炎)																																		
	B型肝炎																																		4週間隔で2回、20~24週を経過した後に1回、合計3回接種
	A型肝炎																																		2~4週間隔で2回、24週を経過した後に1回、合計3回接種

↓ 接種 ■ 通常接種が行われている年齢 □ 接種が定められている年齢 □ 接種年齢 □ 母子感染防止事業

*1 D:ジフテリア、P:百日咳、T:破傷風を表す。

*2 60歳以上65歳未満の者であって一定の心臓、腎臓若しくは呼吸器の機能又はヒト免疫不全ウイルスによる免疫の機能の障害を有するもの

*3 妊娠中に検査を行い、HBs抗原陽性(HBe抗原陽性、陰性の両方とも)の母親からの出生児は、出生後できるだけ早期及び、生後2ヶ月にHB免疫グロブリン(HBIG)を接種、ただし、HBe抗原陰性の母親から生まれた児の場合は2回目のHBIGを省略しても良い。更に生後2,3,5カ月にHBワクチンを接種する。生後6ヶ月後にHBs抗原及び抗体検査を行い必要に応じて任意の追加接種を行う(健康保険適用)。

米国においてインフルエンザ不活化ワクチンが 勧奨されている対象

1. 65 歳以上の者
2. 基礎疾患を有する者と施設内あるいは家族内で接触する者
3. 呼吸器系（気管支喘息を含む）、循環器系に基礎疾患を有する成人及び小児
4. 慢性の代謝疾患（糖尿病を含む）、腎不全、血色素異常、免疫不全（医療行為および HIV による免疫不全を含む）により定期的な通院や入院を必要とする成人及び小児
5. 長期にアスピリン治療を受けているためにインフルエンザの罹患により Reye 症候群を発症するリスクを有する者（生後 6 カ月から 18 歳）
6. インフルエンザ流行期に妊娠している女性
7. 生後 6-23 カ月の小児
8. 0-23 カ月の小児と密に接触する者

参考：経鼻インフルエンザ生ワクチンは5～49歳の健康な者に接種が限られています。

IDSC